
ラブカクテルス その7

風雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その7

【NNコード】

N8062C

【作者名】

風雷人

【あらすじ】

今宵はちょっと切ない愛のカクテルを遠い星に乗せてお届けします。ご賞味あれ。

いらっしゃいます。
どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか?
甘い香りのバイオレットフイズ?
それとも、危険な香りのテキーラサンライズ?
はたまた、大人の香りのマティニー?

わかりました。本日のスペシャルですね。
少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は謎の救世主でござります。

じゅつくつじゅつ。

私は病弱な女。

小さい頃から喘息持ちで、両親にはかなりの心配を掛けてきた。
成長するに連れて、喘息は少しずつ治まっていったが、次々といろいろな病気を起こし、あまり外で遊んだ記憶はない。だから極端な運動オブンチである。

しかし人生、生きていればいいこともある。

あまりに紫外線を浴びていない白い肌は、それなりの得意体質みたいに扱われ、化粧品メーカーからの誘いで、モデルなんかになることができたりした。

綺麗な服を着て、沢山の人々に見られ、いっぱい写真を撮られたりして、悪い仕事ではなかった。

そうして私にも、彼ができた。

仕事で知り合つた人で優しい人。私にはもつたいないと思っていたが、彼曰く私の白い肌を見ていると守りたくなると言つて、しばらく付き合つと、プロポーズされた。

その頃の私は、あまりに忙しいスケジュールのおかげで体はボロボロ。

それでなくともひ弱なのに、限界に来ているのがわかつていても、ありがたい仕事なのにと、断れなくて続けていたので、その言葉に思わずより掛かつてしまつた。

それからほどなくして二人は式を挙げ、結婚した。

しばらくは幸せな新婚生活が続いたが、仕事辞めて家事に専念するようになつてからは、今までの緊張が切れたからか、私は床に着くことが多くなつた。

やがて夫は仕事の忙しさから、帰りが遅くなることが増え、私は一人になることが多くなつた。

そして今日も一人。でもいつもよりも気分がいい。この頃の私ときたら、かなりの疲労感が一日中続いていて、たまに胸が締め付けられるようすに辛い時もあつた。病院へは行つてみたが、診断結果はまだ怖くて聞いていなかつた。

私は体を起こしてベッドに腰掛け、暗い部屋に漂う重い空気を少し手でどけてため息をもらした。

こんなに暗くちゃ氣分が落ち込む一方だ。

私は立ち上がり明かりをつけようとした。しかし、ナゼか不思議なことに、天井から、青白くまあるい円柱状の光が現れたのだった。

私は何だらうと、それをじつと見ていると、その光はやがて円錐状

へと変化していった。そしてその円錐の下の丸の部分は人程の直径になると止まり、その中に黒いものが浮かび上がってきたのだった。それは人の形、に近い形へと段々姿を変えて、次第に大きくなつていった。そしてそれは、まるで、まるで落花生に手と足が生えたような物なのだとわかつてきた。そのうえ、それは円錐の光の中でまるでスポットライトを浴びるかのように立ち、私に頭を下げた。

普通こんな状況に遭遇したら悲鳴をあげるのだろうが、私はその訳がわからない物があまりに愉快なカツコをしているので、クスクスと笑い出してしまつた。

これは誰の何の冗談なのかと思ったが、それよりもなかなかよくできたジヨークだつた。

だが、何か様子が違つていた。

その訳のわからないものは、下げる頭をゆっくり上げると、こんなわとしゃべつた。

なんてよくできた、人形？いや、突然現れたのだから映像？でもリアル過ぎる。なんだうつ。

私は興味深くそれをまじまじと見た。

得体の知れないその目は瞳がなく、ツリあがつていてその中が七色に光り、まるでネオンのように走り輝いている。

私はどんな仕掛けがあるのかと、不思議そうに光の出でこるを見て、いると、その訳のわからない物は、続けて話し、あなたはどうして、いきなり出てきた私に驚かないのかと聞いてきた。

機械のようなその表情がない喋り方に、私はまた首を傾げ、いえ、十分驚いてるけど、あなたこそ何者？と聞き返すと、私のその冷静な態度に何か調子を崩したらしく、口調が慌ててているようにそれは続けた。

わ、わ、私は宇宙人です。

そのおかしな物は、そんな事を言つので、えつ？そんなオチのジョ

ークなの？

なんか期待はずれだとガッカリしてため息をつくよりに、はあと気のない返事を返した。

宇宙人君は私の態度に完全に調子を狂わされようだったが、まさにとりあえずといった感じで続けて喋りつないできた。

その内容がまた随分なもので、

我々はこの星を奪いにわざわざ遠いピーナツ星からやつてきたのだ。まずは手始めにやつて来て一番最初に目に入った、この建物の一番上に住んでいる人間を襲つてみることにした。それがこの私だつたと告げた。

私は、何を宇宙人君が言つているのかがわかるが、あまりに唐突なセンスのないジョークを続けるので、とりあえず誰の仕業か突き止めることにした。そして、宇宙人君に向かつて怒り始めた。

凄い罵声をいきなり大声で言い出したので、宇宙人君は怯んだ。しかし何とか気を持ち直して、私の迫力に負けないようになると、偽物よばわりする私に、失礼なつと、いきなり銃のようなものをどこからか出してくると、私に向かつて構えて、これが本物の証拠だつ、食らえつと打ち放つてきた。

さすがの私も、その行為に反射的に体をこわばらせ、きやあと声を出して体を丸くした。

宇宙人君は続けて何発もの銃声を響かせた。

私は頭を恐る恐る上げ宇宙人君の顔を見た。するとそれは、どうだと自信と満足の顔をしてこちらを見ていた。

しかし私は、私はなぜか痛みがないことに気が付いた。体をゆつくり起こしてあちこち手で確かめてみたが、これといって変化はなかった。

私は、少し笑いながら、

もうつ、ひどい冗談よ。誰の仕業なのか言つてみなさいよ。もう、

呆れて怒る気力もないから。さあ。と言うと、宇宙人君は、あのツリ上がつた不気味な目をもつとツリ上げて、なぜ倒れないんだつと、後退りし、しまいに化物だつ、この星の人間とやらは化物だと、震え始めたのだつた。

その言葉にさすがの私も力チンときた。
こんなか弱い女をつかまえて化物とはなんだつ！今度こそ正体暴いてやると立ち上がつた瞬間、宇宙人君は小さい悲鳴をあげて、光ごと消えたのだつた。

私は部屋に一人取り残されて、キヨトンとしていた。
なんなのだ。すると、今度は自分の上に光が降りてきた。

私はさつきのイタズラの続きかと思い、いい加減になさいと、上を向いて叫ぶと、私は体が軽くなるのを覚えた。
えつ、私透けてきた。そう、私の体は透けはじめ、キラキラと綺麗な光になり始めた。

私はその時、なぜかベッドにもう一人の私が寝ているのに気付いた。
私は理解したくなかったが、理解してしまつた。
今日起きて気分が急によくなつた訳。

宇宙人君に銃を撃たれても何ともなかつた訳。

そう私は幽霊だつたのだ。

私の姿はもう微かにしか残つてなかつたが、私は思った。
もし、宇宙人君の言つていたことが本当なら私つたら。うふふ。

その笑い声は霧が晴れたのように消えていった。

やがて、旦那の彼が家に帰つてきて驚いた。なにしろ、家の中はめちゃめちゃで、奥さんである彼女は亡くなつていたのだから。
彼は彼女を抱きあげて、涙に伏せつた。

なんて悲惨な亡くなり方だ。誰がこんなひどいことを。

せっかく、忙しい今の仕事の引き継ぎが終わって、一人がもつと一緒にいられるよう、転職をしてやり直そうと思つていたところだつたのに。なぜ。

彼は彼女に謝つた。

ごめんよ。守つてやれなくて。君が癌を患つていたのは知つていて隠していたんだ。

ある日、病院から電話で呼ばれ、もう手遅れだつて言われた。ごめんよ。言い出せなかつたんだ。

でもこんな無茶苦茶なこと、一体誰が。

酷すぎる。せめて最後は一人でいてやりたかった。

彼は無念さでまた泣き崩れた。

確かに彼は、最後に彼女を守れなかつたかもしれない。しかし彼女は彼を、いや世界を守つた。

それが出来ただけでも彼女は幸せだつたはず。

でも誰にも彼女のした、最後にして最高の活躍を知るものはなかつたのであつた。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は、またのじ来店、心よりお待ち申し上げております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8062c/>

ラブカクテルス その7

2010年12月4日14時14分発行